

俺の名前は佐藤拓也、28歳。普通のサラリーマンだ。

結婚して3年になる妻の美咲も同い年。

美咲は穏やかな性格で、いつも柔らかい笑顔を浮かべている。

身長は160センチくらいで、スタイルは細身なのに胸がすごく大きい。

服の上からでもはっきりわかるほどのボリウムで、俺は昔からその胸に目がいつてしまう。

優しくて、ちょっと天然なところもあるけど、それがまた可愛いんだ。

俺たちは大学時代に知り合った。

サークルの飲み会で隣の席になったのがきっかけで、話が弾んでそのまま付き合い始めた。

美咲はいつも穏やかで、俺のわがままにも笑って付き合ってくれた。

卒業して2年後にプロポーズして、結婚。

今でも毎朝「おはよう」のキスをして、夜は一緒にご飯を食べて……普通に幸せな夫婦生活を送っていた。

ただ、俺には昔から誰にも言えなかった性癖があった。

それは、寝取られた。

大切な女性が、他の男に抱かれる姿を想像するだけで、胸の奥がざわついて、すごく興奮する。

美咲に対しても、同じだった。

結婚してからも、夜一人で風呂に入っているときや、会社でデスクに座っているとき、ふとそんな妄想が頭に浮かぶ。

美咲が会社の厳つい上司に押し倒されて、大きな胸を揉まれながら喘いでいる姿。

後輩の若い男に壁に押しつけられて、乱暴に腰を振られているところ。

宅配の男が玄関で荷物を置いたまま、美咲をその場で抱き上げて……

あるいは、街で軟派してきた大学生に連れ込まれて、ホテルで何度もイカされている場面。

俺はそんな妄想を何度も繰り返していた。

頭の中では美咲を何度も、他の男に抱かせていた。

そしてその想像だけで、下半身が熱くなって、たまらなくなる。

でも、そんなこと美咲には絶対に打ち明けれなかった。

「気持ち悪い」と思われたらどうしよう。

夫として愛されているのに、そんな変態的な欲望を抱いているなんて、失望されるに決まっている。

だから俺は、いつも笑顔で美咲を抱きながら、心の中だけでその妄想を膨らませ続けていた。

美咲には悠真という、兄弟同然に育った幼馴染がいる。

幼稚園の頃からの付き合いで、美咲が言うには「悠真は家族みたいなもの」

らしい。

俺たちが付き合い始めた頃、美咲は「悠真だけは特別だから、二人で会うのも許してね」と言ってきた。

正直少し不安だったけど、美咲の真剣な顔を見て了承した。

それから何度か三人で会うようになって、俺も次第に悠真と仲良くなっていった。

悠真は穏やかで気さくな男で、俺とも普通に話が合う。

美咲と悠真が並んでいると、傍から見ても本当にお兄ちゃんとお妹さんみたいだった。

異性として意識している感じは全くなくて、むしろそれが安心できるくらい自然な距離感だった。

その日も、悠真が家に遊びに来て、三人で酒を飲んでいた。

リビングのテーブルにピザとビールが並んで、いつものように和気あいあいとした雰囲気だ。

「美咲、今日のピザめっちゃうまいじゃん。拓也、嫁さんが料理上手すぎて羨ましいわ」

悠真が笑いながらビールを飲み干す。

美咲が頬を少し赤くして笑う。

「もう、悠真ったら大げさ。いつも適当に作ってるだけだよ。ほら、悠真の

好きなチーズ多めにしたの。昔からチーズ好きだもんね」

「覚えててくれたんだ。さすが美咲、俺のことよく知ってるなあ」
悠真がからかうように言うと、美咲は肩を軽く叩いて返す。

「当たり前でしょ。幼稚園の頃から一緒にいるんだから。悠真が風邪ひいたとき、お母さんに頼んでお粥作って持ってたのも私だよ？」

「あったなあ、そんなこと。美咲は昔から世話焼きだったよな。拓也も幸せもんだな。毎日こんな優しい嫁さんがいて」

俺はビールを飲みながら、二人の会話を聞いていた。

美咲が悠真のグラスにビールを注いでやる姿、悠真が自然に美咲の肩に軽く手を置いて話す姿。

普通の夫なら少し嫉妬するのもかもしれないけど、俺はその光景を見ているだけで、胸の奥が熱くなった。

兄弟同然に見える二人の距離が、今日は妙に興奮材料に感じてしまう。俺は普段よりビールのペースが速くなっていた。

酔いが回ってきた頃、俺はふと思いついて口を開いた。

なんだか無性にムラムラして、抑えきれなくなっていた。

「なあ、二人とも。本当に異性としてお互いを見たことないのか？」

二人は同時に俺の方を見て、ぽかんとした顔をした。

すぐに美咲が吹き出して笑い始める。

「えー？ 何急に？ 拓也ったら変なこと聞く」

美咲が笑いながら俺の太もを軽く叩く。

悠真も肩を震わせて笑った。

「ははっ、ないない。絶対ないよ。美咲のこと、俺は生まれたときから妹みたいなもんだし。異性として見るなんて、考えたこともないわ」

美咲が頷きながら続ける。

「うん、私も同じ。悠真は男の子だってことすら、意識したことないかも。

一緒に風呂入ってた幼稚園の頃の記憶しかないもん（笑）。今でも弟みたいにしかなえないよ」

俺はさらに突っ込んでみた。

「じゃあ、例えば悠真の体とか見ても、何とも思わないわけ？」

美咲が顔を赤くしながらも、笑って答える。

「思わないよー。悠真の裸なんて、プールで何度も見たし。『あ、悠真また筋肉ついたな』くらいにしかならない。恋愛とか、そういう目で見る対象じゃないんだよね、本当に」

悠真がビール片手に同意する。

「俺も同じ。美咲の胸が大きいのも知ってるけど、それでドキドキしたことなんて一度もない。ただの『美咲の身体』って感じ。家族の裸を見るのと同じだよ。変な気持ちになるわけじゃないじゃん」

美咲が悠真に向かって笑いながら言う。

「でしょ？　悠真も私を女として見てないよね？　もし見てたら、絶対に態度に出てるはずだもん。悠真って嘘下手だから」

「見てないって。美咲が俺の彼女とか嫁とかになったら、逆に気持ち悪いレベルだわ」

二人は顔を見合わせて大笑いしている。

その自然で、なんのよそよそしさもないやり取りを見ながら、俺の胸はますますざわついた。

本当に、安全圏なんだ。

この二人は、絶対に異性として見ていない。

だからこそ……俺の頭の中で、危険な妄想が膨らみ始めていた。

二人が大笑いしているのを見て、俺はビールの勢いもあって、ついとんでもないことを口にしてしまった。

「じゃあ……ホントに美咲の体に興奮しないなら、それを証明して見せてくれよ」

二人は同時に動きを止めて、俺の顔を見た。

「は？　何言ってるの、拓也」

美咲が目を丸くして笑う。

悠真も苦笑いしながらグラスを置いた。

「急に何だよ。お前酔いすぎだろ」

俺は止まらなかった。心臓が早鐘のように鳴っている。

「いや、本気だよ。ホントに異性として見てないって言うなら、簡単だろ。

悠真はパンツ一枚になって、美咲も服を脱いでいってくれ。その過程で、悠真が本当に勃起しないか、見せてくれよ。それで俺も安心できる」

美咲が「ぷっ」と吹き出して、悠真と顔を見合わせた。

「えー、拓也ったらマジで何言ってるの？ 変態すぎるよ」と言いながらも、どこか面白がっているような表情だった。

悠真は明らかに引いていた。

「いや、無理無理。美咲の旦那の前でそんなことできるかよ。普通に考えてヤバいだろ」

俺の頭の中は、もう寝取られ欲でいっぱいだった。

いつも妄想だけで終わらせていたことが、目の前で現実になろうとしている。興奮が理性のブレーキを完全に外していた。

「頼むよ……。本当は俺、二人の関係が少し不安だったんだ。美咲が悠真と二人で会うのを許してるのも、実はいつもドキドキしてて……。でもこうして証明してくれば、俺も完全に安心できる。ただのゲームだよ。酔った勢いの馬鹿げた遊びだって。な？」

美咲は少し驚いた顔をした後、意外とあっさり頷いた。

「ふーん……拓也がそこまで言うなら、まあ大丈夫でしょ？悠真は本当に私を女として見てないんだよね？だったら平気だよ」

悠真はまだ不安そうな顔で、俺と美咲を交互に見た。

「……マジかよ。美咲まで乗り気なのか？俺、なんか変な空気になったらどうすんだよ……」

美咲が笑って悠真の肩を軽く押した。

「いいからいいから。悠真、昔から照れ屋だよね。」

拓也が安心したいって言ってるんだし、ちょっとだけ付き合ってよ。私も脱ぐから、悠真も脱いで」

悠真はため息をつき、観念したように肩を落とした。

「……わかったよ。酔ってるし、拓也が本気で不安がってるなら……仕方ないな」

悠真がまず立ち上がり、「シャツを脱いだ。

程よく筋肉のついた上半身が露になる。

腹筋は割れすぎていないけど、適度に引き締まっていて、健康的な男の体だった。

続けてジーンズを脱ぎ、パンツ一枚になった。

白いボクサーパンツが、少しゆったりと彼の腰に沿っている。

俺は息を潜めて見つめていた。

次に美咲が立ち上がった。少し頬を赤らめながらも、意外と恥ずかしがらずに動き始める。

「じゃあ、私も脱ぐね……」

まずトップスの「シャツをゆっくりと脱いだ。

下に着ていたキャミソールが現れる。薄い生地が体に張り付き、大きな胸の形がくっきりと強調されていた。

ブラのレースの端が少し見え隠れしている。

美咲は少し迷った後、先にスカートに手をかけた。

ファスナーを下ろす音が小さく響き、スカートがすりと落ちる。

薄い水色のパンティが露になった。シンプルだけど、柔らかいレースが縁取られた可愛いデザインだ。

太ももがむっちりとしていて、俺の知っている美咲の体が、こんな状況で急に色っぽく見えた。

悠真は視線を少し逸らしながら、なるべく美咲を凝視しないようにしている様子だった。

でも、俺の目には、悠真のパンツの前がわずかに、ほんの少しだけ膨らみ始めたように見えた。

美咲は続けてキャミソールを脱ぎ始めた。

両手を上げてゆっくりと引き抜く。

大きな胸が、ブラに包まれたままぷるんと揺れた。

白いレースのブラジャーが、彼女の丰满な胸を優しく支えている。

俺は見慣れているはずのその胸が、今夜はいつもよりずっと魅力的に、淫らに見えて仕方なかった。

美咲がブラの肩紐を軽く直しながら、照れ笑いを浮かべた。

「どう？　悠真、全然反応してないよね？　ほら、もっとちゃんと見てよ。勃起してないでしょ？」

悠真は顔を赤くして、声を少し上ずらせながら答えた。

「……ああ、してないよ。美咲の体、ただの……ただの身体だもん。変な気持ちには、ならないって」

美咲が俺の方を見て、悪戯っぽく微笑んだ。

「ね、拓也？　これで安心した？」

俺は喉が渴いたまま、ただ頷くことしかできなかった。

心臓が激しく鳴り、股間は痛いほど硬くなっていた。

安全圏のはずの二人が、こんな姿で俺の目の前にいる。

まだ始まったばかりなのに、俺の興奮はもう抑えきれなくなっていた。

美咲の大きな胸がブラに包まれた姿と、悠真がパンツ一枚で立っている光景を見ているだけで、俺の頭はもう真っ白になりかけていた。

ここで終わるわけにはいかない。

俺は喉を鳴らして、声を少し低くした。

「悠真……せっかくだから、美咲の胸を触ってみてくれよ」

その瞬間、二人の表情が凍りついた。

「は？　ちよっと待て、拓也」

悠真が慌てて後ずさりながら手を振る。

美咲も目を大きく見開いて、俺を睨んだ。

「拓也……さすがにそれはダメでしょ？　いくらなんでもやりすぎだよ」

俺は必死に言葉を重ねた。興奮で声が少し震えていた。

「頼むよ。本当に何も感じないって言うなら、触ったくらいで何も起きないはずだろ？　それで何も無ければ、俺は完全に二人を信じる。もう二人の關係に不安なんて抱かない。約束するよ。ただの証明だ。酔った勢いの馬鹿げたゲームだって……な？」

部屋に少し重い沈黙が落ちた。

美咲は唇を軽く噛み、悠真は困った顔で床を見つめている。

美咲が先に口を開いた。ため息混じりの声だった。

「……悠真がいいなら、私は……拓也がそれで本当に納得するなら、いいよ」
悠真が驚いた顔で美咲を見る。

「美咲……お前、本気かよ？」

美咲は少し恥ずかしそうに目を伏せながらも、悠真の手首をそっと掴んだ。

「いいから。悠真、手、出して」

悠真は渋々、抵抗しながらも美咲に手を引かれるままになった。

美咲は自分の胸の前に悠真の手をゆっくりと導いた。

白いレースのブラに包まれた、柔らかくて大きな胸に、悠真の指先が触れる。その瞬間、俺の中に今まで感じたことのない興奮が爆発した。

胸の奥が熱くなり、息が詰まるような感覚。

妄想の中で何度も見た光景が、目の前で現実になっている。

悠真のパンツの前が、ムクムクとゆっくりと膨らみ始めた。

最初は小さかった膨らみが、はつきりとした形になっていく。

悠真が顔を真っ赤にして慌てた。

「ご、ごめん……美咲。

こんなの、不可抗力だよ！　ただの生理現象だから……本当に、悪気はないんだ」

美咲も少し動揺した顔で、自分の胸に触れている悠真の手を見下ろしていた。でも、彼女はすぐに気を取り直したように言った。

「うん……わかってるよ。悠真は私を女として見てないもんね。ただ触っただけだし」

俺は二人の姿を食い入るように見つめながら、興奮で声がかすれていた。

兄妹のように育ったはずの二人が、下着姿で向かい合って、悠真が勃起して

いる。

その光景が、俺の股間を痛いほど硬くさせていた。

少し重い雰囲気が部屋に漂う中、俺はもう一步踏み込んだ。

「……美咲、鎮めてやったら？」

美咲がびっくりした顔で俺を振り返った。

「え……？」

俺は目を逸らさずに続けた。

「美咲のせいでこうなってるんだろ？ せっかくだから、責任取って鎮めてやってくれよ」

美咲はしばらく言葉を失っていたが、俺が真剣な目で彼女を見つめているのを見て、観念したように小さく息を吐いた。

「……わかった。別に悠真のこと、男として見てないから。ただの作業だし。悠真だって生理現象でしょ？ 大したことじゃないよね」

悠真がまだ動揺したまま、弱々しい声で言った。

「美咲……本当にいいのか？ 俺、なんか変な感じになってるけど……」

美咲は少し頬を赤らめながらも、落ち着いた声で答えた。

「いいよ。悠真は気にしないで。ただ手を貸してあげるだけだから……ね？」
まさかここまでになるとは、本当に思っていないかった。

美咲が少し迷うような仕草を見せた後、悠真の前に跪くように腰を落とした。

そして、悠真のパンツの腰部分に、細い指をかけた。

「じゃあ……脱がすね」

パンツをゆっくりと下ろしていく。

既にギンギンに硬くなった悠真のちんこが、勢いよく飛び出してきた。

太くて血管が浮き出たそれは、先端が少し濡れていて、俺以外の男のちんこを、美咲がまじまじと見つめている。

俺の胸が激しく高鳴った。

美咲が、俺以外の男のものを、こんな間近で見ている。

美咲は少し息を飲んだ後、悠真の顔を軽く見上げて小さく言った。

「……ごめんね、悠真。すぐ終わらせるから」

そう言っ、美咲は小さな右手を伸ばした。

その手が、悠真の熱くなったちんこにそっと触れる。

「っ……!!」

悠真がびくんと全身を震わせ、腰を少し引いた。

美咲の指が、ゆっくりと上下に動き始めた。

最初はぎこちない動きだったけど、徐々にリズムをつけて擦り始める。

俺は息を殺してその光景を見つめていた。

興奮で頭がぼーっとする。

もっと、もっと二人の絡みを見たくなった。

「……美咲、ブラジャー外して見せてあげなよ。」

その方が悠真もすぐ終わるんじゃないか？」

美咲は手を動かしたまま、困ったような顔で俺を振り返った。

「え……？ 拓也、それって……」

俺は興奮を抑えきれずに続けた。

「いいだろ？ ただ見せるだけだよ。」

悠真だって、触られてるだけじゃ我慢できないかもしれないし」

美咲はしばらく迷っていたが、ため息をついて小さく頷いた。

「……わかった。その方がすぐ終わるなら……」

美咲は左手で自分の背中に回し、ブラジャーのホックを外した。

白いレースのブラがゆっくりと落ち、彼女の大きな胸がぷるんと露になる。

形の良い膨らみの先端に、小さくて薄いピンク色の乳首が、ぴんと立っ

た。

悠真の目が、その胸に釘付けになった。

喉がごくりと動き、生唾を飲み込む音がはっきり聞こえた。

俺は心の中で色々と思っていた。

（やっぱり……異性として見てたんだな。

兄妹みたいだって言ってたくせに……）

落胆と、強烈な興奮が同時に胸に広がった。

美咲の胸が露になったせいか、悠真の表情が苦悶に歪む。

眉を寄せ、歯を食い食いしながら、腰が小刻みに震え始めた。

「美咲……俺、もう……」

美咲の手の動きが少し速くなった。

すると悠真が低くうめき、腰を突き出すようにして――

びゅるっ、びゅるるるっ！

大量の白い精液が、美咲の胸目掛けて勢いよく発射された。

温かそうな液体が、彼女の左の胸から谷間にかけて、どろりと飛び散る。

二発、三発と続き、美咲の柔らかい肌を汚していく。

美咲は少し目を細めて、驚いたように自分の胸を見下ろした。

「……うわ、すごい量……」

悠真は荒い息を吐きながら、申し訳なさそうに頭を下げた。

「ご、ごめん、美咲……本当に、止まらなくて……」

俺はただ、目の前の光景を呆然と見つめていた。

美咲は自分の胸に飛び散った白い精液を、ティッシュを取ってゆっくりと拭き取っていた。

大きな胸が少し揺れるたびに、俺の視線が釘付けになる。

美咲は拭き終えると、少し照れくさそうに俺の方を見て言った。

「こんなことになっちゃったけど……悠真はまだ私の幼馴染だよ。変わらな

いからね！ただの生理現象なんだし、気にしないで。タダの出来事だから」俺は興奮の余韻で頭がぼーとしながらも、慌てて謝った。

「ごめん……俺、調子に乗りすぎた。二人に変なことさせて……」
内心では「いいもん見れたな」くらいに思っていたけど、口には出さなかった。

すると、悠真がまだ荒い息を整えながら、口を開いた。

「なあ、美咲はどうなんだよ？俺ばかりお前を異性として見てないか確認させられてさ。美咲も俺のこと、異性として見てないなら……何されても感じたりしないよな？」

その言葉に、俺の心臓がドクンと大きく跳ねた。

要するに、ただの幼馴染で異性として見てない悠真に、どれだけ触られても興奮しないだろーということだ。

美咲の体が他の男に触られるかもしれないと思うだけで、俺の股間がまた熱く疼き始めた。

これは……まさか、もっと先へ進む展開か？

美咲は少し慌てた様子で手を振った。

「え、ちょっと悠真……何言ってるの？もう十分証明できたでしょ？ こんなの、もうやめようよ」

でも悠真は納得がいない様子で、目を少し細めて美咲を見つめていた。

「いや、フェアじゃないだろ。俺だけ一方的に確認されて、美咲は何もされてないじゃん。本当に俺を男として見てないなら、触られても平気なはずだよな？」

美咲は困った顔で俺に助けを求めるような視線を送ってきた。

俺は一瞬悩んだ。

ここで止めるべきか……でも、胸の奥から湧き上がってくる興奮が、俺を突き動かした。

「……美咲、悠真の言うことも一理あるかもな。俺もちゃんと納得したいんだ。お前が本当に悠真を異性として見てないってことを、証明してくれよ」
美咲は目を丸くして俺を見た。

「拓也まで……？」

俺は軽く頷いた。

「頼むよ。短い時間だけだ。

それで全部終わりだ」

美咲はしばらく唇を噛んで迷っていたが、観念したように小さくため息をついた。

「……わかった。悠真にしてあげた10分間だけってルールならいいよ。その間に私が何も感じなかったら、終わりね。あくまで『異性として見てない証明』だからね？」

悠真は少し息を荒げながら頷いた。

「ああ、それで証明しよう。俺たちはただの幼馴染だ。異性として見てないってことを、ちゃんと確かめようぜ」

そう言いながらも、悠真の目は明らかに血走っていた。

さっき射精したばかりだというのに、すでに股間のものがまた少しずつ硬くなり始めているのがわかった。

美咲は自分の大きな胸を軽く腕で隠すような仕草をしながら、俺と悠真を交互に見た。

その表情には、戸惑いと少しの不安が混じっていた。

美咲は体を振らせながら、悠真の責めに必死に耐えていた。

悠真の口が乳首を強く吸い、舌がねっとりと転がすたびに、美咲の腰が小さく跳ねる。

彼女は唇を強く噛み、喉の奥で漏れそうになる声を必死に押し殺していた。

両手は悠真の肩に軽く置かれているけど、押しのけるでもなく、ただ耐えているように見えた。

一方、悠真の下半身はさっき大量に射精したばかりだというのに、もう完全にギンギンに勃起していた。

太い血管が浮き出たちんこが、ピンと上向きに反り返っている。

（なにが「異性として見てない」だよ……）

俺は心の中で毒づいた。

さっきまで「家族みたい」「兄妹みたい」と言っていたくせに、悠真の目は完全に欲情した男の目になっていた。

部屋に異様な熱気と緊張が充満している中、スマホのストップウォッチが10分経過を知らせるアラームを鳴らした。

ピピピッ、ピピピッ。

悠真がはっと我に返ったように顔を上げ、美咲の胸から口を離した。

美咲は膝を軽く曲げて体を支えながら、はあはあと荒い息を切らせていた。頬は真っ赤で、目が少し潤んでいる。

大きな胸が激しい呼吸に合わせて上下に揺れ、乳首は悠真の唾液でびしょ濡れに光っていた。

俺はストップウォッチを止めながら、なるべく平静を装って聞いた。

「……美咲、感じたか？」

美咲はすぐに首を横に振った。

息を整えながら、少し上ずった声で答える。

「感じてない……よ。びっくりしただけ。怖かっただけだから……」

でも、俺の目は美咲の下半身に釘付けになっていた。

薄い水色のパンティの股の部分に、大きなシミができていた。

布地が透けるくらいにぐっしりと濡れていて、彼女が興奮しているのは一

目でわかった。

俺はそれを静かに指摘した。

「美咲……パンティ、すごいことになってるぞ。あそこ、びしょびしょじゃん」

美咲は慌てて自分の股間に視線を落とし、顔をさらに赤くした。

「これは……生理現象だから！ただ触られただけだし、女の体はそういう風に反応するの。感じてないよ、本当に……」

でも、その言い訳が弱々しく聞こえるのは俺だけじゃなかった。

事実として、美咲が感じて濡れているのは明らかだった。

俺はさらに、悠真の下半身も指差した。

「それに、悠真もまた勃起させてるぞ。さっき出したばかりなのに、もうこんなに硬くなってる。本当に『異性として見てない』って言えるのか？」

悠真は自分の股間を見て、慌てて両手で隠そうとしたが、完全に隠しきれない。

顔を赤くしながら、苦しそうに言った。

「……これは、その……不可抗力だって……」

美咲は息を乱したまま、俺と悠真を交互に見つめていた。

その目には、戸惑いと、少しの罪悪感、そして隠しきれない動揺が混じっていた。

安全圏だったはずの幼馴染との境界が、確かに少しずつ崩れ始めている――俺はそんな現実を、胸の奥がざわつく興奮とともに、はつきりと感じていた。アラームが鳴ってから数分間、部屋は重い沈黙に包まれていた。

美咲はまだ息を整えきれず、パンティの大きな濡れシミを隠すように太ももを軽く閉じている。

悠真は自分の股間を隠しきれずに、気まずそうに立っていた。

俺は深呼吸をして、二人に向かって最後の提案を切り出した。

「なあ……最後に一つだけ、頼みたいことがある」

二人が同時に俺を見た。美咲の目には不安が、悠真の目には警戒が浮かんでいる。

「俺と美咲が付き合う前、美咲と悠真で旅行したことあったよな？美咲から聞いたことがある。二人で温泉旅行に行って、一つの部屋で寝たって」

美咲が慌てて口を挟んだ。

「え……？ あれは昔の話だよ？ 家族旅行の延長みたいな……」

俺は首を横に振って続けた。

「うん、知ってる。でも、ホントになにもないって言うなら、今日、二人で一夜を過ごして欲しいんだ。このまま、ふたりだけでベッドに入って、朝まで一緒に過ごしてほしい」

悠真が目を大きく見開いた。

「は？ 拓也……お前、何言ってるんだよ？ 一夜って……マジで？」
美咲も声が上ずっていた。

「ちょっと待て、拓也！ それって……どういう意味？ 私たち、さっきまでただのゲームだって言ってたのに……」

俺は二人の困惑した顔を交互に見ながら、静かに言葉を続けた。

「俺からしたら、もうすでに……美咲で勃起させた悠真も、悠真に触られて濡らしてる美咲も、ちょっと裏切り者みたいに感じてるよ。信じてたのに、こんなに簡単に反応しちゃうなんてさ」
美咲が傷ついたような顔をした。

「裏切り者って……そんな……私、悠真のこと本当に男として見てないよ。ただの生理現象だって……」
悠真も声を低くして言った。

「拓也、俺たちを信じてくれよ。これ以上は……本当にまずいだろ」
俺は首を横に振り、なるべく穏やかな声で訴えた。

「だからこそ、最後にこれで信じさせてほしいんだ。ふたりとも裸でベッドに入って、朝を迎える。それだけのことだよ。セックスしなくたって、ただ一緒に寝るだけでもいい。俺だって、こんな変なことをさせてるんだから……万が一、二人がセックスすることになっても、俺は怒らない。離婚するとも言わない。約束するよ」

その言葉を聞いた瞬間、二人の表情が一気に強張った。
美咲が震える声で聞いた。

「……本気で言ってるの？ 私と悠真が、裸で一緒に寝て……朝まで？ それで本当に信じてくれるの？」
俺は頷いた。

「ああ。本気だ。これで完全に納得できる。お前たちが本当に『ただの幼馴染』だってことを、証明してほしい」

悠真が苦い顔でため息をついた。

「拓也……お前、酔ってるだけじゃなくて、本気でそんなこと考えてるのか？ 美咲を……俺に預けるってことだぞ？」

美咲は腕で胸を隠しながら、俺をじっと見つめてきた。

その瞳には、戸惑いと、どこか諦めのような色が混じっていた。

「……拓也が、どうしても言うなら……でも、本当に何もしないよ？ ただ一緒に寝るだけ……ね？」

悠真はまだ納得いかない様子で、頭を掻きながら小さく呟いた。

「マジかよ……俺、どうしたらいいんだ……」

俺は胸の奥で激しい興奮と、わずかな後悔が混じり合うのを感じながら、二人の答えを静かに待っていた。

安全圏だったはずの関係が、今まさに崩れ落ちようとしている――

その予感が、俺の体を熱く震わせていた。

二人が了承したので、俺は二人を寝室に連れて行った。リビングの明かりを落とし、寝室のドアを開ける。

「さあ、入って。二人とも全裸のままな」

美咲は胸と股間を腕で隠しながら、顔を赤くして部屋に入った。

悠真も気まずそうに股間を片手で覆い、後に続く。

俺はドアの前で立ち止まり、できるだけ落ち着いた声で言った。

「俺はソファで寝るよ。朝になったら声をかけるから、ゆっくり休め」

そう言ってドアを閉め、わざと足音を立てながらリビングの方へ歩くふりをした。

しかしすぐに足音を忍ばせて寝室のドアの前に戻り、耳をそっと当てた。

この家は意外と壁が薄くて、声がよく漏れ聞こえてくる。

中から美咲の小さな声が聞こえた。

「……悠真、ごめんね。こんな変なことに巻き込んだじゃって……」

拓也があんなこと言うなんて、私もびっくりしたよ」

悠真がすぐに返す。

「いや、俺の方こそごめん。さっき胸触っちゃったりして……」

本当に悪かった。美咲が嫌な思いしたよな」

美咲が少し明るくしようとするような声で言った。

「ううん、もういいよ。」

どうせ朝まで一緒に寝るだけだし……ね？

昔みたいに、ただ隣で寝るだけだよ。大丈夫だよね？」

「そうだな……昔の旅行のときも、狭い布団で二人で寝たもんな」
悠真が少し笑いを含んだ声で続ける。

「美咲、夜中にトイレ行くなって俺を何度も起こしたじゃん。あの頃はまだ小さかったのに」

「もう、思いつかないでよ！ 恥ずかしい……」

あのとき悠真、寝相悪くて布団全部独り占めしてたよね。

私、端っことで寒い思いしたんだから」

「ははっ、悪かったよ。」

今もセミダブルだから、結構寄らないと落ちちゃうぞ。

……いいか？」

ゴソゴソと布団やシーツが擦れる音がする。二人がベッドに潜り込む音だ。しばらくは他愛もない会話が續いていた。

「そういえば、悠真って最近仕事どう？」

相変わらず忙しそうだよね」

「まあな。美咲は？ 拓也と結婚してから家事とか大変じゃないか？」

「ううん、拓也は優しいから助かってるよ。」

悠真も早くいい人見つけないとね」

会話の切れ目に、ふと短い沈黙が落ちた。
すると悠真が、少し低い声で口を開いた。

「……なあ、胸……触っていいか？」

俺の心臓がドクンと大きく跳ねた。

美咲がすぐに、でも力のない声で否定した。

「……やだよ」

悠真が少し間を置いて、甘えるような口調で畳みかける。

「セックスしなければいいんだろ？」

頼むよ。ただ少しだけ触りたいんだ……

さっき触った感触が、忘れられなくてさ」

美咲が弱々しく返す。

「触るだけだからね？　本当に……それ以上はダメだよ？」

「わかってるよ。ただ触るだけだって」

またゴソゴソと、布団の中で二人が体制を変える音がした。

悠真が後ろから美咲を抱くような体勢になったらしい。

「やべえ……」

悠真が低く、感嘆するような声を出した。

「美咲のおっぱい、後ろからこうやって揉むとか……」

ずっとしてられるかも。柔らかすぎてヤバイ」

美咲が慌てた声で焦る。

「ちよっと、悠真！」

拓也に聞こえたらどうするの！

声、大きすぎだよ……」

悠真が笑いを含んだ声で返す。

「大丈夫だって！」

ソファで寝てるって言ってたし、こっちまで声届かないよ。

……ほら、こんな感じでいい？」

時折、美咲の口から喘ぎ声に似た、甘くて抑えきれない吐息が漏れ聞こえてきた。

「ん……っ、ふう……」

俺はドアの前で立ち尽くし、股間が痛いほど硬くなっているのを感じていた。安全圏だったはずの幼馴染が、裸でベッドの中で妻の胸を後ろから揉んでいる。

そしてその自然で、どこか楽しい会話と甘い吐息が、俺の興奮を容赦なく煽り立てていた。

美咲の甘い吐息が少し続いた後、彼女が少し息を乱しながら言った。

「ねえ……いつまで触ってるの？」

もう十分でしょ？」

悠真が慌てたように、でも少し名残惜しそうな声で謝る。

「ごめん、ごめん……すぐ離すよ。」

ただ……もう一つだけ、頼み事していいか？」

美咲が少し警戒した声で聞き返した。

「なに？」

悠真が少し間を置いて、甘えるような口調で言った。

「こっちを向いて欲しいんだ……」

後ろからじゃなくて、ちゃんと顔を合わせて」

美咲がすぐに聞き返す。

「なんで？」

言いながらも、ゴソゴソと布団の中で体を動かす音が聞こえてきた。

二人が向き合うような体制に変わっているらしい。

悠真が少し興奮した声で続けた。

「胸に……顔を埋めたいんだ。」

さっき触っただけじゃ物足りなくて……」

美咲が驚いたような、少し笑いを含んだ声を出した。

「なにそれ！ 急に変なこと言う……」

悠真が必死に頼み込む。

「頼むよ！　ほんの少しだけでいいから。」

美咲の胸、すごく柔らかくて……一度でいいんだ」

美咲は少し迷うような間を置いた後、観念したように小さく息を吐いた。

「……まあ、それくらいなら……いいよ。」

でも、顔を埋めるだけだからね？」

悠真が喜びの声を上げた。

「ありがとう……！」

そしてすぐに、悠真がアホみたいにテンションの高い声で言った。

「やべえ……このまま窒息死してもいいかも！」

美咲のおっぱい、最高すぎる……」

美咲が吹き出すように笑った。

「バカじゃないの？」

悠真って意外と大げさなんだね……」

でもその声は、どこか満更でもなさそうに聞こえた。

甘えたような響きが混じっている。

次の瞬間――

「んあっ……！」

突然、美咲の大きめな喘ぎ声が響いた。

それまで抑えていたものより明らかに大きな声だった。

美咲が慌てて抵抗する声が続く。

「ちよっ……それは約束が違うでしょ!？」

顔を埋めるだけって言ったのに……!」

悠真からは返事がない。

代わりに、ちゅぱちゅぱと湿った音がはっきり聞こえてきた。

舌で舐めているような、乳首を吸うような音だ。

美咲の喘ぎ声が、それに混じって漏れ続ける。

「あっ……んっ、ふぁ……っ」

チクビを舐めているのか。

悠真が美咲の乳首を口に含んで、ねっとり舌を這わせているのが容易に想像できた。

俺はドアの前で、悔しさと強烈な興奮がぐちゃぐちゃに混じったまま、耳をさらに研ぎ澄ませて二人の声を聞き続けていた。

安全圏だったはずの幼馴染が、今は妻の胸に顔を埋め、乳首をしゃぶっている。

その現実が、俺の胸を締め付けながらも、下半身を熱く疼かせていた。

「そこは……ダメだって……」

美咲の細くて震える声が、ドア越しに聞こえてきた。

でもその声は、すでに力がない。

悠真が少し息を荒げながら、低い声で言った。

「美咲……こんなに濡れてるのに？」

パンティ、ぐしょぐしょじゃん……指が簡単に滑るよ」

美咲が慌てて否定しようとする。

「だって……それは……んっ……!!」

しかしその言葉は、甘い喘ぎ声にかき消された。

悠真が美咲の下半身に触れている音が、微かに布が擦れる音と一緒に聞こえてくる。

美咲の声がさらに上ずる。

「やっ……そこ、触っちゃ……ああっ……」

悠真が申し訳なさそうな、でも興奮を抑えきれない声で謝りながら言った。

「ごめん、美咲……」

俺、もう我慢できないかも……

このままじゃ、ほんとにヤバイ……」

美咲が慌てて声を大きくした。

「ダメ！ 悠真、待って！

それだけは本当にダメだってば……！

セックスは約束が違うよ……」

少しの間、ゴソゴソと布団が動く音がした。

美咲が悠真を押しとどめようとしているのが伝わってくる。

すると美咲が、息を乱しながら提案した。

「……わかった。

手と口で……してあげるから。

それで我慢して？」

その言葉を聞いた瞬間、俺の胸に強い嫉妬と興奮が同時に突き刺さった。

（美咲が……自分の幼馴染に、手と口でしてあげるって……？）

俺の妻が、他の男のちんこを……）

悔しさで胃が締め付けられるような感覚。

でも同時に、下半身が熱く疼いて、股間が痛いほど硬くなっていた。

安全圏だと思っていた悠真に、美咲が自らそんなことを申し出ている現実が、

俺の寝取られ欲を容赦なく刺激していた。

部屋の中が、しばらく静かになった。

重い沈黙が数秒続いた。

そして――

ちゅぱ……ちゅぱ……じゅるっ……

湿った、ねっとりとした舐める音が、はっきりと扉の向こうから聞こえてきた。

た。

美咲が悠真のものを口に含んでいる音だ。

時折、悠真の低いうめき声が混じり、美咲の息遣いが少し乱れている。

俺はドアに額を押しつけるようにして耳を澄ませ、

嫉妬と興奮がぐちゃぐちゃに混じった感情のまま、

二人の行為の音に集中していた。

ちゅぱ……じゅるっ……れろれる……

美咲が悠真のものをしゃぶる湿った音が続いている中、時折、美咲自身の甘い喘ぎ声も混じって聞こえてきた。

「んっ……ふぁ……っ」

どうやら悠真も美咲の下半身に指を這わせて触っているらしい。

美咲が完全は無反応ではいられなくなっているのが、声から伝わってくる。

俺はドアの前に立ちながら、複雑な気持ちで耳を澄ませていた。

半分は望んでいたことだった。

でもやはり、悠真でも美咲に興奮してしまうのかと思うと、残念な気持ち

胸に広がった。

（やっぱり……安全圏じゃなかったんだな……）

悠真のくぐもった声が、次第に切羽詰まって大きくなってきた。

「美咲……もう……出すよ……」

「んんっ……!」

美咲が苦しそうな声を上げた。

喉の奥で何かを飲み込むような、こもった音がする。
まさか口に出したのか……？

見えないのがもどかしくて、俺は拳を強く握りしめた。
悠真が慌てた声で謝る。

「ごめん、美咲……！」

出ちゃった……」

美咲は咳き込みながら、少し不満そうな声で言った。

「ホントだよ……口に出すなんて……」

急にすぎるってば……咳き込んだじゃったじゃない」

悠真が申し訳なさそうに続ける。

「本当にごめん……我慢できなくて……」

美咲の口、気持ちよすぎて……」

美咲はまだ少し咳をしながらも、怒っている様子は意外と薄かった。

「……もう。」

悠真、こんなに興奮してたんだ……

もう大丈夫？ 落ち着いた？」

悠真が小さく息を吐きながら答えた。

「うん……ごめんな。」

本当に、止められなかった……」

美咲は少し間を置いてから、静かに言った。

「わかったよ。もう怒ってないから……」

ただ、拓也にどう説明しようか……ちよつと悩むな」

その言葉を聞いて、俺の胸がざわついた。

美咲は俺に何て報告するつもりなんだろう……。

すると美咲が、明るく振る舞おうとするような声で悠真に提案した。

「じゃあ……もう寝ようか？」

もう遅いし、明日も早いでしょ」

悠真が少しホッとしたように返事をする。

「ああ……そうだな。寝よう」

それから、怪しい音や声は一切聞こえなくなった。

ただ、布団が少し動く音と、二人が体勢を整える小さな物音だけが、静かに響いていた。

俺はドアの前でしばらく立ち尽くし、

興奮と嫉妬と、予想外の「安全圏の崩れ」を実感しながら、

ゆっくりとリビングのソファアへ戻った。

胸の奥が熱くざわついたまま、朝が来るのを待つしかなかった。